

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：栗東歴史民俗博物館地域人材育成プログラム“子どもたちに伝える、むかしの人のくらしと知恵”

事業者名：栗東歴史民俗博物館

住 所：滋賀県栗東市小野223-8

T E L：077-554-2733

F A X：077-554-2755

HPアドレス：<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/>



連携事業者名：栗東歴史民俗博物館市民学芸員の会

会 場：栗東歴史民俗博物館及び移築民家旧中島家住宅

事業期間：平成21年6月1日 ～ 平成22年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

栗東歴史民俗博物館では平成2年の開館以来、市民に活用される、開かれた博物館づくりをひとつの使命として活動してきた。平成15年度以降は特に市民とともにある博物館活動を目指しており、その実践として“市民学芸員”を育成し、博物館活動に関わっていただくように取り組んできた。

本事業は、平成5年度以降、子どもたちが地域の資料に親しみ、地域文化の継承を図るために当館が取り組んできた博物館教室「むかしのくらし」を、市民学芸員の会と博物館学芸員が連携して実施しようとするものである。このことは、市民学芸員の活動の拡大と、市民学芸員と博物館の連携強化へとつながり、当館の使命である市民とともにある博物館活動を実現するものであり、かつ博物館を支援する人材を育成しようとするものでもある。

2. 企画内容

①事業目的

栗東歴史民俗博物館では平成5年度から、小学校3・4年生（かつては3年生）を対象とした博物館教室「むかしのくらし」を開催してきた。これは社会科で学ぶ、地域の昔のくらし調べの単位に対応した体験学習プログラムで、栗東歴史民俗博物館敷地内にある移築民家旧中島家住宅を使って子どもたちにさまざまな“むかしのくらし”を体験させる体験学習プログラムである。これまでは博物館学芸員が毎年度、プログラムの開発や改訂を行い、子どもたちの指導にあたってきた。

この事業は、博物館教室「むかしのくらし」について、市民学芸員の会と連携して、会員が博物館学芸員とともに新たなプログラムの開発やプログラムの改訂に携わり、子どもたちの指導にあたることにより、博物館活動を支援する地域の人材を育成し、博物館と地域との連携の輪を広げることを目的としている。

②事業概要

事業は、栗東歴史民俗博物館が主催する博物館教室「むかしのくらし」において、平成21年度に実施する新プログラムを市民学芸員の会とともに策定する。また市民学芸員の会会員を、策定した新プログラムの指導者として育成し、実際の博物館教室「むかしのくらし」の場において指導者として活躍していただくものである。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

新プログラムの開発会議（6月2日・6月16日）

平成21年度の博物館教室「むかしの暮らし」で実施する、新しいプログラムを開発。プログラムの基本は、博物館の収蔵資料を用いて、高度成長期以前の栗東の暮らしを、体験しながら学ぶというもの。

検討した結果、新プログラムは、収蔵品の竿秤（収蔵資料No.F0277）と、その複製資料を用い、子どもたちに①重さを量る道具は昔と今では違う、②昔と今では重さを表す単位が違う、ということを体験しながら学んでもらう内容とすることに決定した。



▲竿秤を用いた体験プログラムを開発することとなった。竿秤の使用方法や子どもたちにどうやって指導するか、など検討しているところ。

新プログラムで使用する複製資料、解説パネルづくり（6月～8月）



▲館蔵品の竿秤（収蔵資料No.F0277）をモデルに、子どもたちが体験で使う複製の竿秤を作成。

新プログラムで子どもたちが用いる竿秤の複製などを作成。既成の材料を利用し、モデルとした収蔵資料No.F0277に近いものを作成した。

新プログラムの実験・指導者研修（7月）

2回にわたる開発会議で決定した、竿秤を用いたプログラムについて、実際にどのような説明や手順、体験内容とするかを検討した。その結果、①尺貫法と竿秤の説明→②竿秤を使って実際に重さを量る体験→③まとめ、の順で実施することに決定。実際にこの手順で市民学芸員、博物館学芸員が本番を想定して、実践した。

新プログラムモニタリング調査

（7月11日、9月12日）

制作した竿秤の複製資料を、博物館に来館した一般の子どもたちでモニタリング調査し、改良点を探った。子どもたちへの解説では、市民学芸員の記憶にある竿秤のある風景を中心とした体験談が効果的であることなどが分かり、この結果をプログラムの指導方法に反映させることとした。



▲一般来館者の子どもたちを対象に、竿秤の複製資料を用いて、開発中のプログラムを試す。

新プログラムの策定（7月～9月上旬）

開発会議、新プログラムの実験・指導者研修、モニタリング調査の結果を踏まえて、【表①】のように新しいプログラム“竿秤で重さを量ってみよう!!（竿秤体験）”を策定した。

博物館教室「むかしの暮らし」参加校教員対象研修（8月5日）

博物館教室「むかしの暮らし」に参加する小学校の担当教員を対象にして実施。平成21年度の博物館教室「むかしの暮らし」全体についての説明や各プログラムの学習内容、体験内容、学習のねらいなどを研修した。

博物館教室「むかしの暮らし」の実施（9月～2月）

9月から2月までの間、15回17校、1,299人の3年生、4年生を対象に、博物館教室「むかしの暮らし」を実施。市民学芸員の会員が毎回3～6名、博物館学芸員が1～4名、担当して実施した。



▲解説パネルや体験談などを交えながら、竿秤について子どもたちに説明する市民学芸員。



▲市民学芸員が実際に子どもたちに竿秤を体験させる。

プログラム名	竿秤で重さをはかってみよう!! (竿秤体験)
テーマ	むかしの計量方法
場所	旧中島家住宅 軒先
持物	なし
所要時間	20分～30分
使用する道具	竿秤・竿秤複製・竿秤の目盛写真パネル・解説パネル
時代	昭和30年代まで
学習内容	竿秤で実際のものの重さを量ることで、普段使っている秤（上皿秤やバネ秤など）とは違う原理を用いた道具、竿秤がかつてあったことを知る。竿秤は、昭和30年代ごろまでは家庭で用いられる重さを量る器具の主流であったが、その後上皿秤などによって変わられた。現在使われているメートル法による重さの単位（キログラム、グラムなど）が尺貫法にかわって使われるようになったのも、このころのことだ（昭和41年に完全切り替え）実際に竿秤を使うことで、①仕組みの違う秤を使っていた時代があったこと、②重さを量る単位自体も、時代によって変化し、ほんの数十年前までは別の単位が使われていた。の2点を学んでもらう内容となる
体験内容	重さを量る対象物（100匁・150匁・200匁のもの）を、竿秤を使って量ってみる。右手で緒を持ち、左手で分銅を移動させ、分銅と量る対象物とのバランスが取れる目盛を確認する。体験は実物資料と複製品を使い、4～5班に分かれ、全員がバランスをとる体験を行なう。全員が終了したところで、現在の秤（メートル法の上皿秤）で100匁（＝375g）、150匁（562.5g）などを確認する。
学習のねらい	①重さを量る道具は今と昔では違う。 ②今と昔では、重さを表す単位が違う。 この2点について、体験を通して実感させること。

【表-①】新プログラム“竿秤で重さをはかってみよう”（竿秤体験）これに基づいて子どもたちへの解説、体験指導などを行う。

事業総括・報告書刊行（2月26日～3月15日）

博物館教室「むかしの暮らし」の受講がすべて終了した後、関係した市民学芸員6名、博物館学芸員2名で事業の総括を行った。また事業についてまとめた報告書を刊行した。

（2）参加者の数

参加者人数 延べ 市民学芸員128名、児童1,292人、引率教員65名

内 訳：

日付	内容	参加者数
6月 2日	第1回新プログラム開発会議	市民学芸員5名・博物館学芸員2名
6月 16日	第2回新プログラム開発会議	市民学芸員5名・博物館学芸員2名
6月 27日	新プログラム用竿秤試作会	市民学芸員5名・博物館学芸員2名
7月 7日	新プログラム実験・指導者研修	市民学芸員5名・博物館学芸員2名
7月 8日	新プログラム用竿秤制作	市民学芸員2名
7月 11日	新プログラムモニタリング調査	市民学芸員4名・博物館学芸員1名
8月 5日	参加校教員対象研修	市民学芸員3名・博物館学芸員2名
8月 12日	新プログラム用竿秤制作	市民学芸員4名
8月 13日	新プログラム用竿秤制作	市民学芸員1名
8月 23日	新プログラム用解説パネル製作	市民学芸員1名・博物館学芸員1名
8月 25日	新プログラム用竿秤制作	市民学芸員4名・博物館学芸員1名
9月 12日	新プログラムモニタリング調査	市民学芸員3名・博物館学芸員1名
2月 26日	事業統括会議	市民学芸員6名・博物館学芸員2名

日付	学校名・学年	人数	指導者数
9月 17日	栗東市立大宝小学校 4 年生	児童 103 名・引率 4 名	市民学芸員 3 名・博物館職員 3 名
	草津市立玉川小学校 4 年生	児童 84 名・引率 6 名	
9月 30日	大津市立比叡平小学校 3 年生	児童 27 名・引率 2 名	市民学芸員 3 名・博物館職員 3 名
	栗東市立治田東小学校 4 年生	児童 99 名・引率 5 名	
10月 15日	栗東市立大宝西小学校 4 年生	児童 60 名・引率 3 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 3 名
10月 28日	栗東市立葉山小学校 4 年生	児童 91 名・引率 3 名	市民学芸員 4 名・博物館職員 4 名
11月 5日	栗東市立大宝東小学校 4 年生	児童 119 名・引率 4 名	市民学芸員 4 名・博物館職員 4 名
11月 12日	野洲市立野洲小学校 3 年生	児童 122 名・引率 7 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 4 名
1月 14日	大津市立富士見小学校 3 年生	児童 90 名・引率 4 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 2 名
1月 15日	大津市立逢坂小学校 3 年生	児童 58 名・引率 2 名	市民学芸員 4 名・博物館職員 2 名
1月 27日	安土町立安土小学校 3 年生	児童 80 名・引率 5 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 3 名
2月 3日	滋賀県立聾話学校小学部 3 年生	児童 6 名・引率 3 名	市民学芸員 4 名・博物館職員 1 名
2月 4日	栗東市立治田西小学校 4 年生	児童 99 名・引率 3 名	市民学芸員 4 名・博物館職員 2 名
2月 5日	栗東市立治田小学校 4 年生	児童 89 名・引率 4 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 2 名
2月 9日	東近江市八日市西小学校 3 年生	児童 46 名・引率 4 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 2 名
2月 10日	栗東市立葉山東小学校 3 年生	児童 62 名・引率 3 名	市民学芸員 5 名・博物館職員 2 名
2月 26日	湖南市菩提寺北小学校 4 年生	児童 57 名・引率 3 名	市民学芸員 6 名・博物館職員 1 名

(3) 事業により作成した印刷物等

『栗東歴史民俗博物館支援地域人材育成プログラム報告書』

子どもたちに伝える、むかしの人のくらしと知恵』

A5 版 25 ページ 刊行部数 300 部



(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

「市民学芸員が伝える昔の暮らし 大津の児童、竿ばかり体験」
(滋賀報知新聞 平成 21 年 10 月 14 日号掲載)

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

市民学芸員の会と博物館が協働で、博物館教室「むかしのくらし」のなかのひとつのプログラムを、開発から指導まで実施するという事業では、市民が積極的に博物館へ関わり、活躍する場をつくることのできた。事業を進めるなかで、特に小学生に直接プログラムを指導するという場面では、市民学芸員がプログラムの問題点や疑問点を発見し、自主的に解決方法をみつけ、説明や指導の順序を工夫する姿がみられた。これは博物館が予想していた以上の積極的な事業への参加であった。したがって、事業の目的である博物館を支援する人材を育成する、ということについては一定の成果をあげることができたといえよう。

一方、課題となるのが、今後こうした人材との関係をいかに継続させ、人材の輪を広げていくのかということである。これには博物館教室「むかしのくらし」のように、市民が関わることを続ける取り組みを継続することが重要である。また、今回積極的な市民の参加が引き出せた要因のひとつには、高度成長期以前のくらしぶりを子どもたちに伝える、という素材にもあると考える。事業で市民学芸員が体験に基づいて話したむかしのくらしの様子は、子どもたちにも好評で、市民学芸員へのやり甲斐へも繋がっていた。地域の人材との関係を保ち、さらに広めるには、そうした人々が得意とする素材を生かすことができるテーマ設定も重要なポイントとなると感じた。